

ティーマット

TMATニュースダイジェスト

2026年6月30日発行

発行 特定非営利活動法人(NPO 法人) TMAT  
〒102-0074  
東京都千代田区九段南 1-3-1 東京堂千代田ビルディング 14F  
Tel 03-3263-8136 Fax 03-5214-6664  
Email info@tmat.or.jp

制作 一般社団法人徳洲会 広報部

TMAT

News Digest

Non-Profit Organization

TOKUSHUKAI  
Medical Assistance Team

TMAT

Non-Profit Organization

No.18

www.tmat.or.jp

WHO EMT 認証を  
国内NGOで初取得

Type1 Mobileとして臨床対応能力など高評価

審査を終え、あらためて災害医療への熱い思いを確認した審査団とTMAT隊員ら

国内外の災害現場などで医療支援活動を展開するNPO法人TMAT（徳洲会医療救援隊）は5月17日、WHO（世界保健機関）の緊急医療チーム（EMT=Emergency Medical Team）認証を取得した。世界で65番目、NGO（非政府組織）としては国内初の取得。TMATが取得した認証は、1日あたり最低50人の外来患者さんに対応する移動型の診療チームのカテゴリである「Type1 Mobile」だ。同16、17日の2日間、四街道徳洲会病院（千葉県）を会場として、WHO関係者ら審査員による認証審査（Verification Visit）を受けた。



ケイシー審査チームリーダー（左）からEMT認証書を受け取る福島TMAT理事長

EMT 認証は、大規模災害などが発生した被災国に派遣される国際医療チームの質を担保するために、WHOが運用している認証制度。EMT 認証を取得するには、WHOが策定した「緊急医療支援チームの分類と最低基準」に基づく各種基準をクリアし、審査に合格しなければならない。

同基準には、人道支援に関わる自己完結型の医療チームとしての基本理念や組織体制、治療行為の標準手順、ロジスティクス（物資や通信手段の確保、連絡、調整、情報収集など）体制、水や汚物・廃棄物処理に関わる衛生上の体制（WASH）などに関する最低基準が書かれており、これらの基準に基づいた業務標準手順書（SOP）の

作成が求められている。

こうした制度が設けられた背景には、2010年のハイチ地震の際、多くの国の医療支援チームが被災地に入り活動を行ったものの、医療の質や活動内容に大きなばらつきがあり、被災国の保健医療システムとの調整不足が課題となったことがある。そこでWHOはチームの統制を図り、質を担保することを目的に、EMT認証制度を構築した。

EMTはチームの機能に応じ3タイプのカテゴリがある。TMATが取得したType 1 Mobileのほか、1日あたり最低100人の外来患者に対応する固定型診療のType 1 Fixed、外来・手術・入院に対応するType2、集中治療室なども備え、より大規模に外来・手術・入院に対応するType 3がある。認証は5年ごとの更新制。

TMATは今から5年前の2021年にWHOに認証取得のための申請を行った。同時にメンター（指導者）が決定し、本格的に準備を開始。これにより認証プロセスに入っ

た。以降、チェックリストを用いた自己評価や、メンターとの定期的なオンライン会議による助言を受けながら、SOPの策定や必要な資機材の整備、実際の運用を想定したフィールドホスピタル（FH）展開訓練など実施してきた。

展開訓練では、TMATが所有する大型テントや資機材を用いて、活動拠点となる自己完結型の診療所や、宿泊用テント、発電機、廃棄物処理装置、トイレなどを実際に設営。模擬患者さんに対する診療訓練などを通じて課題を洗い出し、SOPや診療エリアの配置など改善を重ねた。

また、TMATはWHOが中心となって開催するEMTグローバルミーティングにも積極的に参加。これは、世界中のEMT認証チームや認証を目指す組織が一堂に会し、災害医療のあり方や国際的な調整メカニズムの強化について議論・情報共有を行う国際会議。世界の最新動向をキャッチアップし、他国の災害医療チームとの交流も図ってきた。これまで15年にパナマ共和国で初参加した後も、16年に中国、19年にタイ、22年にアルメニア、25年にアラブ首長国連邦での会議に参加してきた。

WHO EMT 認証は“質が高く国際社会から信頼される災害医療



審査員がFH内を巡回し実際の診療手順など確認

ご挨拶

ふくしま やすよし  
NPO法人 TMAT理事長 福島 安義

皆さまには常日頃よりTMATの活動に多大なるご支援を賜り、誠に有難く厚く御礼申し上げます。この度、TMATは念願でありましたWHOが運営するEMT認証制度の中の「WHO EMT Type1 Mobile」の認証を取得しました。日本のNGOとしては初、世界で65番目の認証取得になります。

WHO EMT認証制度は大規模災害や感染症の流行、紛争などによる健康危機発生時に被災国に派遣される国際医療チームの質・安全性・自立性を保証する国際認証制度です。この認証取得は、TMATが国内外の災害や健康危機に対し、国際基準に基づいた安全で質の高い医療支援を提供できる組織であることを示すものです。

この制度は、2010年に発生したハイチ地震時に世界中から多くの医療チームが派遣されたものの、医療の質や活動内容にばらつきがあり、被災国の保健医療システムとの調整不足などが課題となり発足しました。私たちの取得したEMT Type1 Mobileとは、被災地へ迅速に展開し、外来診療を中心に訪問診療などを含めた一次医療を提供する移動型医療チームとして位置付けられているものです。

私たちは、“生命だけは平等だ”の理念の下で、「いつでも、どこでも、誰でもが最善の医療を受けられる社会」を目指し、医療救援活動を行ってまいりますので、皆さまには今後とも、ご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

チーム”であることを示す世界共通の認証。これにより被災国やWHOから信頼され、活動要請を受けやすくなるとともに、EMTの共通基準によって、WHOや各国EMT、国際機関との情報共有や役割分担など連携・協働をより円滑に行えるようになることが期待できる。また、世界の災害医療支援はEMT認証制度を中心に運用されつつあり、認証取得は国際的な活動継続・発展のための重要な基盤と位置付けられる。

### TMATメンバー全員が一致協力 ゴールではなく新たなスタート

認証審査当日は、ショーン・ケイシー WHO Regional EMT Secretariat/WHO WPRO（WHO地域緊急医療チーム事務局・WHO西太平洋地域事務局職員）を審査チームリーダーとする審査員4人、メンター3人、外務省・政府チームである国際緊急援助隊（JDR）医療チームなどからオブザーバー9人が四街道病院に来院。

TMAT側は野口幸洋・事務局長（一般社団法人徳洲会〔社徳〕医療経営戦略室課長）や合田祥悟医師（札幌東徳洲会病院集中治療センター副センター長）ら約50人の隊員が各々の役割をこなした。

初日は書類審査を実施。TMATとその母体である徳洲会の組織概要などを説明したうえで、野口・事務局長がSOPの要点を説明。審査員との質疑応答を繰り返しながら、さまざまな項目についてWHO基準にのっとったSOPとなっているかを確認した。



審査会場となった四街道病院の駐車場に設置したFH

具体的には、意思決定や出動プロセス、現場と本部の連携、派遣隊員の選考基準・動員手順、教育・研修、隊員の健康・安全確保、報告システム、臨床的優先順位の決定や動線管理、入院対応、感染症対応、疼痛・鎮静管理、薬局、通信、電源・燃料、食糧管理、撤収など項目は多岐にわたった。

2日目は実際の診療手順などを確認するため、同院駐車場に設営したFHでの審査を実施。診療所内での受付やトリアージ（優先度・重症度分類）、患者動線、隔離エリア、産科・緊急対応エリア、薬局、処置室、レントゲンエリア、記録、また倉庫や電源・燃料、WASH、食糧などについても、それぞれを担当する隊員が説明。ここでも審査員との質疑応答を繰り返し行った。

TMATの福島安義理事長をはじめ、橋爪慶人・副理事長（東大阪徳洲会病院院長）、八木沼正子理事（社徳看護部門本部長）、石川一郎理事（社徳本部長）が帯同しながら審査の様子を見守った。

審査結果の発表で、ケイシー審査チームリーダーから「われわれはTMATがWHO EMT認証『Type1 Mobile』の基準を満たしていることを確認しました」と審査の合格が告げられると、TMAT隊員から拍手が沸き起こった。

（2面に続く）

| 国内外の派遣実績 |     |                        |  |
|----------|-----|------------------------|--|
| 1995年    | 1月  | 阪神・淡路大震災               |  |
| 1995年    | 9月  | サハリン大地震                |  |
| 1999年    | 9月  | 9.21台湾大地震              |  |
| 2004年    | 10月 | 新潟県中越地震                |  |
| 2004年    | 12月 | インドネシア・スマトラ沖地震（その他4カ国） |  |
| 2005年    | 2月  | 福岡西方沖地震                |  |
| 2005年    | 10月 | パキスタン北部地震              |  |
| 2006年    | 2月  | フィリピン レイテ島地滑り災害        |  |
| 2006年    | 5月  | インドネシア ジャワ島中部地震        |  |
| 2007年    | 3月  | 能登半島沖地震                |  |
| 2007年    | 7月  | 新潟県中越沖地震               |  |
| 2008年    | 5月  | ミャンマーサイクロン災害           |  |
| 2008年    | 5月  | 中国・四川省大地震              |  |
| 2008年    | 6月  | 岩手宮城内陸地震               |  |
| 2008年    | 6月  | 岩手北部地震                 |  |
| 2010年    | 1月  | ハイチ大地震                 |  |
| 2010年    | 2月  | チリ地震                   |  |
| 2010年    | 3月  | 中国・青海省地震               |  |
| 2010年    | 10月 | 奄美豪雨災害                 |  |
| 2011年    | 3月  | 東日本大震災                 |  |
| 2011年    | 10月 | トルコ東部地震                |  |
| 2013年    | 11月 | フィリピン台風災害              |  |
| 2015年    | 4月  | ネパール大地震                |  |
| 2015年    | 9月  | 関東豪雨災害（常総市）            |  |
| 2016年    | 4月  | 熊本地震                   |  |
| 2016年    | 10月 | ハイチハリケーン災害             |  |
| 2018年    | 7月  | 西日本豪雨災害                |  |
| 2018年    | 9月  | 北海道胆振東部地震              |  |
| 2018年    | 10月 | インドネシアスラウェシ島地震         |  |
| 2018年    | 11月 | ロヒンギャ難民支援              |  |
| 2019年    | 8月  | 九州北部大雨                 |  |
| 2019年    | 9月  | 台風15号（千葉県）             |  |
| 2019年    | 10月 | 台風19号（長野県・宮城県・他2件）     |  |
| 2020年    | 7月  | 令和2年7月豪雨（熊本県）          |  |
| 2022年    | 4月  | ウクライナ避難民支援             |  |
| 2023年    | 2月  | トルコ・シリア大地震（トルコ）        |  |
| 2023年    | 9月  | モロッコ地震                 |  |
| 2024年    | 1月  | 令和6年能登半島地震             |  |
| 2024年    | 9月  | 令和6年9月能登半島豪雨           |  |
| 2025年    | 4月  | 2025年ミャンマー地震           |  |

※赤字は国内、青字は国外

(1面から続く)

とくに、①徳洲会グループを基盤とした安定した組織運営体制、②国際派遣に必要な自己完結型運用能力、③高い臨床対応能力、④医療廃棄物管理体制が高く評価された。なかでも医療廃棄物管理に関して、TMATと外部協力事業者が開発した特殊な焼却炉（高温蒸気を熱源とし無酸素状態で燃やさずに炭化させることでダイオキシンなど有害物質の発生を大幅に低減できる）が優良事例として評価され、WHO EMTグローバルミーティングで他の災害医療チームと情報共有することを推薦された。

審査の合格を受けてTMATの福島理事長は「TMATは1995年の阪神・淡路大震災における医療支援活動を原点として設立され、これまで国内外あわせて40回の災害医療支援活動を実施してきました。その30年以上にわたる経験と活動の積み重ねが、今回のWHO EMT認証という形で国際的に評価されたことを大変うれしく思います」と述べた。

続けて「災害医療を行う団体には、迅速な対応だけでなく、支援の質と安全性が求められます。TMATは2022年のEMTグローバルミーティング参加以降、手順書整備、資機材整備、人材育成、訓練の実施など継続的な改善を進めてきました。今回の認証取得をゴールとせず、『いつでも、どこでも、誰でもが最善の医療を受けられる社会を目指して』というTMATの理念の下、今後も世界各地で災害に苦しむ方々への医療支援活動を継続していきたいと考えています」と、あらためて所信表明。

野口・事務局長は「5年越しで取り組んできたWHO EMT認証が、ようやく形となりました。これは間違いなく、TMATメンバー全員で協力しながら達成した認証だと思います。準備を進めるなかで、想像以上に大きな規模になりましたが、だからこそ見えてきた課題や改善点も



WHO EMT Type1 Mobile認証書。審査員とメンターが署名

多くありました。ここからさらに、より良いチーム・より良い活動にしていければと思っています。私たちの目的は、立派な資機材を被災地に持ち込むことではなく、一刻も早く被災地に行き医療を届けることです。TMATの理念を再確認し、今回のWHO EMT認証取得を新たなスタートラインとして、今後さらに世界で活躍できるよう精進していきます」と意気込む。

合田医師は「WHO EMT Type1 Mobile認証取得は、TMATにとって長年の夢でした。約160ページに及ぶSOPの策定や、幾度となくFHの設営訓練を行い、チーム一丸となって厳しい審査準備を乗り越えてきました。日本の民間NGOとして初となるこの国際認証は、世界基準の『自己完結型』災害医療チームとして認められた証であり、誇りに思っています。しかし、これはゴールではなく新たなスタートであり、TMATの理念の下、今後も関係各位のご協力をいただきながら、国内外の健康危機や災害対応において、さらに質の高い支援を提供できるよう研鑽を続けてまいります」と抱負を語った。

### FH展開訓練や反省会を実施 認証取得の影に地道な努力

認証取得に向けて、EMTとしての活動の完成度を高めるために欠かせないのがFH展開訓練だ。25年12月21日には第4回となる同訓練を実施した。その約1カ月前の11月末に、WHO関係者を招いて行っ

た模擬審査（Pre-Verification Visit）での指摘事項をふまえ、隊員が円滑にFHを運用できるかを確認し、改善を図ることが目的だ。

当初は四街道病院の敷地を会場とする予定だったが、天候不良のため近隣の植草学園大学の体育館で実施。主に徳洲会グループの多職種からなる37人の隊員が参加した。

訓練開始にあたって、野口・事務局長は「FH各エリアでの活動の手順書を、誰が見ても理解でき運用可能な内容に、ディスカッションしながらブラッシュアップすることが今回の訓練の大きな目的です」と呼びかけた。訓練のもうひとつの重点項目は、模擬審査で指摘を受けた設備面の確認を行うこと。Type1 Mobileでも急な分娩に対応する必要があるとの指摘をふまえ、FH内に産科対応用のスペースを設け、レ

アウトや動線、患者対応の確認などを行った。

隊員たちが協力してFHを設営し、その後、医療者役、患者役、評価者に分かれてシミュレーションを実施。感染症疑い、創傷、出産直前の妊婦、急変、骨折疑いなど想定した10症例の患者対応を通じ、受付、診療、処置、処方、カルテ記載まで一通りの動きを確認した。

訓練の各場面で「感染疑いの患者さんが来た場合には、直接、感染エリアへ誘導する」など運用面の確認を行った。また、妊婦さんへの対応時には「現有の設備・装置で対応できるか、他に必要であれば何が足りないかなどを考えながら取り組み、振り返りの際に積極的にフィードバックしてください」と、より良いFH構築に向けた声かけもあり、活発にディスカッションを行いながら訓練を進めた。



急変による心肺停止を想定した蘇生措置のシミュレーション（25年12月のFH展開訓練）

訓練実施後には各エリアや症例対応の課題、改善点、手順書に含めるべきことについて参加者にアンケートを実施。アンケート結果を隊員間で共有するとともに、その後日には反省会も開き、FH内の各機能のエリア配置や、エリアごとの隊員の役割、設備・物品、動線などの改善点について意見を出し合った。これらをもとに実際にレイアウトを変更したりSOPの修正を行ったりするなど、手間を惜しまず地道に取り組んできたことがEMT認証取得という結果につながった。

## 審査チームやメンターなどからのコメント



### 国際的な健康危機・災害医療に大きく貢献

審査チームリーダー ショーン・ケイシー  
WHO地域緊急医療チーム事務局・WHO西太平洋地域事務局職員

「TMATをWHO EMT Type1 Mobileとして検証できたことを大変光栄に思います。TMATは強力な臨床対応能力と確かなロジスティクス能力を示し、国際派遣可能なEMTとして必要な自己完結性を備えていることを証明しました。TMATは、今後の国際的な健康危機・災害医療対応に大きく貢献できる立場にあり、WHO西太平洋地域事務局としても、その活動を支援していくことを楽しみにしています」



### 世界中の被災者のために一層の貢献を期待

メンター 甲斐達朗  
外務省・国際緊急援助隊医療チーム、NPO法人HuMA理事長

「TMATの皆さま、WHO EMT Type1 mobileの認証おめでとうございます。皆様の努力が認められ、メンターとして非常にうれしく思っております。自己完結型のチームとして、世界中の被災者のために、ますますの貢献を期待しております」



### 高い専門性と強い使命感が大きな力に

メンター アンソニー・クック  
NCCTRC/AUSMAT（豪州国立集中治療・外傷対応センター／医療支援チーム）

「この4年間、TMATと共に歩み、認証取得までの過程においてメンターとして支援と助言を行えたことを大変光栄に思います。関わったすべての方々が、その献身と貢献に対して称賛されるべきです。TMATの高い専門性と強い使命感は、今後もEMT分野において、さらなる発展と活躍を続けていく大きな力になると確信しています」



### 質の高い医療支援を提供できると確信

メンター ヤン＝エリック・ラーセン  
WHO西太平洋地域事務局職員

「TMATは、WHOが定めた厳格な認証基準を満たすだけでなく、それを上回る成果を示してきました。SOPの改善、自己評価への取り組み、FH運営に尽力する専門性をもった隊員の姿勢は模範的なものでした。TMATは、緊急事態下にある世界中の人々を支援したいという純粋な思いでつねに活動してきました。この並外れた思いやりと専門性により、TMATが質の高い医療支援を提供できることを私は確信しています。TMATチームの皆さま、この素晴らしい成果に心よりお祝い申し上げます。そして、すべてのTMATメンバーの献身と、たゆまぬ努力に深く感謝いたします。TMATがこれからも成長を続け、世界に持続的な貢献をしていくことを楽しみにしています」



### 徳洲会の人道的価値が認められた証し

日本災害医学会理事 久保達彦  
世界災害救急医学会理事、広島大学大学院医系科学研究科教授、  
京都大学ヘルスセキュリティセンター教授

「日本のNGOとして初となるWHO EMT認証取得、誠におめでとうございます。長年にわたる地道な準備と研鑽を経て見事に結実させたこと、心からの敬意を表します。また、そのような素晴らしいチームを育み、支えてこられた徳洲会グループの皆さまにも、心よりお祝いを申し上げます。TMATは“生命だけは平等だ”という徳洲会の理念のまことに実践者であり、国籍・人種・宗教・社会的立場を超え、最も支援を必要とする被災者へ医療を届ける活動は、この理念が国境をも越えて具現化された姿そのものなのではないでしょうか。今回の認証は、TMATの医療技術や運営能力が国際基準に達したことを示すとともに、その根底にある徳洲会グループの普遍的な人道的価値観が世界に認められた証でもあると感じます」



EMT認証の取得を目指し相互に知見を共有

## ウクライナ医療団の 視察受け入れ

### EMT認証取得へ相互に知見を共有

TMATは1月19日、ウクライナ医療団の視察を受け入れた。TMATが拠点とする四街道徳洲会病院（千葉県）で、意見交換やTMATの資機材の見学を行った。今回の視察はJICA（国際協力機構）の支援で実現した。

ウクライナは緊急・災害医療体制強化の一環で、WHO（世界保健機関）のEMT（緊急医療チーム）認証取得を目指している（Type 1Fixed）。災害医療の活動実績が豊富なTMATが、同認証（Type 1Mobile）取得に向け準備していることから、視察対象となった。

来日したのは、ウクライナ保健省や緊急災害医療センターなどに所属する医師、IT・ロジスティクス担当者ら6人。はじめに野口幸洋TMAT事務局長が歓迎の挨拶で、「非常に近いカテゴリーのEMT認証をお互いに目指していますので、今日はそれぞれが抱える悩みや課題について意見交換を行い、相互に参考になればと考えています」と呼びかけた。

参加者の自己紹介に続いて徳洲会やTMATの活動実績など説明し、意見交換を実施。医療廃棄物の処理や発電装置、鎮痛用の麻薬、産科対応、食糧など多岐にわたるテーマで話し合った。その後、院内の倉庫にあるTMATの資機材を見学した。



四街道病院の倉庫でTMATの資機材を見学

## 国内6回・国際3回・病院防災7回

## 各トレーニングコース開催 国内修了者は1000人達成

TMATは2025年7月から26年6月までに、国内災害医療支援トレーニングコースを7回、国際（海外）災害医療支援トレーニングコースを3回開催した。国際コースは、国内コースをベースにした海外支援特化型の1日研修コースで、22年度に新設。各コースを修了すると、それぞれTMAT隊員としての活動参加要件を満たす。国内・国際コースとともに、座学と机上訓練（グループワーク）で、活動実績を学んだり、災害発生時の対応をシミュレーションしたりする。

国内コースは25年9月27日に東京本部（31人）、10月25日に仙台徳洲会病院（22人）、11月1日に札幌東徳洲会病院（14人）、12月6日に湘南大磯病院（神奈川県、19人）、26年1月24日に東京本部（23人）、3月14日に野崎徳洲会病院（大阪府、33人）、国際コースは25年9月28日（24人）、26年1月28日（21人）、6月28日（19人）に東京本部で開催。国内コースの修了者数は1,000人を超えた。

6月28日は「WHO EMT Type1 Mobile」認証取得も報告した。また、災害発生時の病院の対応を総合的に学べる病院防災コースは7回開催。25年7月13日に日高徳洲会病院（北海道、19人）、8月24日に湘南鎌倉総合病院（神奈川県、32人）、10月12日に札幌東病院（19人）、10月18日に成田富里徳洲会病院（千葉県、30人）、11月8日に野崎病院（29人）、12月20日に屋久島徳洲会病院（鹿児島県、13人）、26年2月8日に静岡徳洲会病院（25人）で開催した。



病院防災コースの様子

# 災害を科学する～経験を科学に

## 第31回日本災害医学会で8演題発表

第31回日本災害医学会総会・学術集会在3月19日から3日間、新潟県で開催された。テーマは「災害を科学する～経験を科学に 新潟&熊本から発信」。TMATは合計8演題を発表した。主題演題を中心に紹介する。

合田祥悟医師(札幌東徳洲会病院集中治療センター副センター長)は、「これからの国際緊急援助の在り方について」をテーマにしたパネルディスカッションに登壇。『All Japan』で挑む国際緊急援助の未来－ミャンマー地震でのGO-NGO連携を超えて－と題し、ミャンマー地震(2025年3月)でのTMATの活動について発表した。

TMATは、各国政府機関(GO)がアクセス困難な震源地に近い地区で、モバイルクリニックを開設し活動。現地のNGO(非政府組織)や企業、日本の他のNGOとの連携により、互いのリソースを有効活用しながら効率的な支援を展開した。合田医師は、他のNGOとの情報共有などにより、GOと協働できたことを紹介し、官民が活動を補完し合う「GO-NGO連携」の有効性を指摘。

世界情勢が複雑化するなか、今後の国際緊急援助のあるべき姿として、①組織の枠組みを越えた統合：個別の組織活動から“All Japan”パッケージでの支援、②平時からのプラットフォーム構成：有事に即応できる官民共同の対応・訓練、③現地主導の尊重：現地の力を引き出し、自立を支援するパートナーシップ、④DX(デジタル変革)化：現地情報のデータ共有による可視化と評価を提言として掲げた。



今回も多くのTMAT隊員が参加。フォトコーナーで用意されていた新潟県の名産品など抱え記念撮影



今後の国際緊急援助について提言する合田医師

野口幸洋・事務局長は、「極限状況を乗り越える力－国際緊急人道支援における『支援者支援』の多角的アプローチ」をテーマにしたパネルディスカッションに登壇。「民間NGO医療支援チームにおける海外派遣隊員のサポート体制」と題し、TMATが国外で災害医療支援活動を行う際の隊員に対する支援について発表した。

はじめに、近年、海外災害では政治的・治安的課題を抱える地域での支援ニーズが増加し、隊員へのリスクが一層高まっていることを指摘。事務局として、今までの活動経験から支援者(隊員)支援の課題を洗い出し、とくに①補償(保険・賠償・給与)、②メンタルヘルス、③病院など所属している機関への支援の強化に努めていることを説明した。

具体的に、①では保険会社と連携し、災害支援時の専用保険加入制度を構築して補償を充実、②では活動終了後1週間・1カ月・3カ月でメンタルヘルスチェックを実施し、専門家によるフォロー体制も確立、③では所属機関の窓口を明確化し、毎日の活動報告の共有などを挙げ、隊員と所属機関双方の安心感につながっていることを強調した。

野口・事務局長は「派遣隊員が“組織から支えられている”と実感できる体制が、持続可能な災害医療支援を実現するための重要な基盤と考えます」と指摘。より強固なサ



事務局の視点でTMATの支援者支援を説明する野口・事務局長

ポート体制の構築に意欲を見せた。

他の発表は次のとおり(いずれも一般演題のポスター発表)▶野口・事務局長「避難所支援からみる民間NGO医療チームの役割－TMATの30年の活動を通して」▶阪本志帆TMAT事務局員(一般社団法人徳洲会医療安全・感染管理部副主任)「NGOの医療支援活動における事務職の役割－病院業務経験を生かした災害医療支援の可能性－」▶柳川拓哉薬剤師(四街道徳洲会病院)「フィールドホスピタル展開訓練を行い見えた課題について」▶吉川瑞帆薬剤師(同)「災害時薬物治療を行う際に必要となる資材の作成と使用時の課題」▶村田宇謙医師(湘南鎌倉総合病院救急総合外科部長)「自院被災を想定した病院防災訓練の実践と課題－TMAT講師による実地シミュレーションの報告」▶浅野京香看護師(徳之島徳洲会病院)「スポーツイベントを活用した国際EMT訓練:徳之島トライアスロン大会における症例検討と運営体制の改善」



合田医師(青色の服)は、会期中に行われた日本災害医学会公認のCRASH試行コースも受講

### 第5回福岡BHELPに協賛

## 避難所支援で研鑽を積む



TMAT隊員も多数参加。当初の予定よりも規模を拡大して開催

第5回福岡BHELP標準コースが2025年10月4日に福岡徳洲会病院で開かれ、NPO法人TMAT(徳洲会医療救援隊)の隊員ら約20人が受講した。日本災害医学会が運営する災害対応標準化トレーニングコースで、発災直後から被災地域内で支援者となり得る医療・保健・福祉に関する専門職と、防災業務に従事する行政関係者が対象。災害対応での知識、共通言語・原則を多職種で共有することや、発災当日から避難所での活動を効果的・効率的に実践することなどを目的としている。

今回はTMATが協賛し、講義前に野口幸洋・事務局長が挨拶。TMATを紹介した後、「災害支援は複雑化しています。共通言語・共通認識の下、災害支援が必要で、そのためにBHELPは非常に優れた研修です」と強調した。

その後、同コースがスタート。指定緊急避難場所・指定避難所・指定福祉避難所の概要、災害対応の共通言語「CSCATTT」、要配慮者

対応の共通言語「CSCAHHH」、指定緊急避難場所から生活の場としての指定避難所への移行、避難所の生活環境のアセスメント、住民の健康維持に配慮した避難所の環境整備などをテーマに、講義やグループワークを行った。同コースのインストラクター資格をもつTMAT隊員の鈴木裕之医師(福岡徳洲会病院救急センター長)も講師を務めた。

終了後、TMAT隊員から「避難所に関する基本知識を習得できて良かったです」(大浦敦美・野崎徳洲会病院看護主任)、「避難所運用について外部で学べることに非常に興味がありました。あらためて確認できたこともありまして、足りない部分も見つかり受講して良かったです」(久保健一・湘南大磯病院看護師長)といった声が聞かれた。

翌5日には同院で第2回福岡BHELPインストラクターコース/ブラッシュアップコースも開催。2日間を通じて多くのTMAT隊員が参加したことに、鈴木医師は「ふたつのコースを連続して受講できるチャンスはまれなため、声をかけさせていただきました」と明かし、「活動実績が豊富な方も参加いただき、私自身、身の引き締まる思いでした」と振り返った。



受講者に挨拶する鈴木医師

## ★ミャンマーの学生らに感謝状 通訳など現地活動をサポート

TMATは2025年9月8日、ミャンマーにある日本語学校EGAOの学生らに感謝状を贈呈した。TMATは25年4月、マグニチュード7.7の大規模地震で被害を受けたミャンマーに隊員を派遣。震源地に最も近いザガイン市で、6日間で計254人の診療を行うなど災害医療支援活動を行った。感謝状は、同校学生ら8人が通訳などとしてTMATの活動をサポートしたことに對するもの。

EGAOのメイズインウーCEO(最高経営責任者)と宮下拓也・副代表兼講師が来日した機会に、都内のTMAT事務局にふたりを招待し贈呈式を実施。野口幸洋・事務局長と阪本志帆・事務局員が感謝状を手渡した。

野口・事務局長は「入国ビザの関係で派遣できるメンバーが限られ、現地で適切な活動ができるか不安ななか、被災地から離れたヤンゴンから駆け付け、献身的に協力していただけたことに感謝しています」と謝意を表明。

自身も活動に参加したメイズインウーCEOと宮下副代表は「被災地のために何か協力できればという気持ちから、学生たちとTMATの活動に参加しました。この活動から学んだことを生かしなが、学生たちには国のために貢献できる人材に成長してくれるといいです」。



右から野口・事務局長、宮下副代表、メイズインウーCEO、阪本・事務局員

### ビッグレスキューかながわ2025

## 大規模地震想定での訓練に参加

TMATの合田祥悟医師(札幌東徳洲会病院集中治療センター副センター長)や中野航一郎医師(湘南藤沢徳洲会病院救急センター医長)らは2025年11月9日、神奈川県主催の大規模災害想定訓練「ビッグレスキューかながわ2025」に参加した。訓練は大規模地震でインフラが停止し、多数の傷病者が発生した想定で進行。

主会場のひとつとなった湘南鎌倉総合病院(神奈川県、災害拠点病院)で、TMAT隊員は同院職員らとともに有事での病院機能維持、トリアージ(緊急度・重症度選別)、初期対応など実践的な訓練にあたった。

訓練を通じて、エレベーター停止下での患者搬送やスタッフ配置、ベッドコントロール、臨時治療スペースでの医療物品確保など、多岐にわたる課題が浮き彫りとなった。また、院内別会場では地域の医療機関のDMAT(行政主導の災害派遣医療チーム)も参集し、病院・物資支援や搬送調整など情報収集・整理訓練を並行して行った。

訓練後の振り返りで中野医師は「TMATからは2チームが訓練に参加し、赤ブースと搬送のヘルプにあたりました。訓練では、搬送先の間違いやブースの色の取り違えなど、多人数での活動ゆえの情報の錯綜が課題だと感じました。ここまでの規模の訓練は貴重であるため、今後もぜひ参加して貢献したいです」と感想を語っていた。



病院職員らと共にトリアージや初期対応を実施

# 多機関連携災害時訓練に参加

## 離島で国内外の支援チームと連携

TMATは2025年11月7日から2日間、NPO法人ピースウィンズ・ジャパン (PWJ) 主催の第6回多機関連携災害時医療救助訓練に参加した。被災地で支援活動を行う諸団体との連携強化を目的とした大規模訓練。今回は芸予諸島の大島（愛媛県今治市）で行い、国内外の多様な被災地支援機関とシミュレーションを通じ連携のトレーニングを重ねた。訓練自体は3日間実施し、延べ48団体、合計280人が参加した。

## 国内外48団体・計280人が集結

訓練は瀬戸内海地域で震度6強の地震発生という想定の下、11月6～8日に実施。島内の①中学校（廃校）、②港と港に隣接する公園の2カ所で行った。TMATは7日から参加し、②の会場で先に現地入りした支援チームから引き継ぎ、PWJをサポートする訓練を行った。

参加した隊員は大田修平医師（八尾徳洲会総合病院外科医長）、吉澤典成薬剤師（同院）、久保健一看護師（湘南大磯病院看護部長）、浅野京香看護師（徳之島徳洲会病院）、村上歩紀看護師（宇治徳洲会病院）、吉川瑞帆薬剤師（四街道徳洲会病院）、関根龍晟・救急救命士（生駒市立病院）の7人。また、野口幸洋 TMAT 事務局長が訓練の様

子を見守った。

一行は、協議により、持参したエア TENT を PWJ が展開していたフィールドホスピタル（FH:野外の仮設医療施設）のひとつに連結させ、診療スペースを増設。その後、サポートを要請された各スペースに隊員を配置し、活動を開始した。

具体的には、「診療エリア」での診療・診療補助や家族対応、「薬局」での薬の払い出しや説明、管理、さらに J-SPEED（災害医療チームが使用する標準カルテ）入力、また、離れた場所の「指揮所」で外部連絡や調整（国の災害医療支援チームの DMAT 調整本部や搬送先・搬送手段など）、EMIS（広域災害救急医療情報システム）入

力なども行った。

とくに今回の訓練では外国人対応も求められ、フィリピンや台湾から実際に訪れた支援チームと連携したり、日本語や英語がまったく通じない外国人傷病者に対応したりする場面も見られた。最後に、それぞれ振り返りを行い、初日を終えた。

翌日は前日の改善点などを確認するミーティングからスタート。その後、前日同様、「診療エリア」、「薬局」、「指揮所」での支援を求められ、それぞれ隊員を配置し活動した。2日間で計12時間に及んだ訓練が終了。各セッションでの振り返り、さらに全体での振り返りを行った後、閉会式で解散となった。参加した隊員は一様に感激していた。



### 歴史があり何でもできる総合診療救急のイメージ

PWJは紛争地や災害被災地での人道支援を中心に活動するNGO（非政府組織）。医療を軸とした災害緊急支援プロジェクト「空飛ぶ捜索医療団“ARROWS”」を立ち上げ、国内外の被災地に赴き支援活動を展開している。25年3月のミャンマー地震ではTMATがPWJの活動を引き継ぐなど連携した実績もある。

同プロジェクトリーダーの稲葉基高医師は「災害の時には行政だけでカバーできない部分が必ずありますし、経験上、そういう時に民間組織に期待される部分がかなりあ

ると思っています」と指摘。「ただ、民間の組織がバラバラに動いていたら、そのインパクトは小さくなってしまいますので、こうした訓練を通じて顔の見える関係を築いたり、連携する際の課題を解決したりしたいと考えています」と意義を強調。

そのうえ、TMATに対し「歴史のある組織。何でもできる総合診療救急みたいな医師や看護師が多いイメージもあります。海外にも出ていけるので、親和性が高いと思います。今後も一緒に行っていきたくたいです」と期待を寄せる。訓練実施から約1カ月後の12月2日には関係者がオンラインで振り返りも行った。



**災害版電子カルテ訓練良かった**  
浅野看護師

「資機材に限られた環境などは、島でも日常のなかで起きていますので、何となく想像してできたところもありました。今回、災害版電子カルテの訓練もあって良かったです。インターネットの環境が整っているなど前提条件はありますが、もっと訓練を積み重ねる有効的だと思います」

**走りながらの良い訓練**  
大田医師

「災害に対する準備は大切ですが、完璧に行うことは困難。その意味でも、振り返りを行い、翌日には改善していく“走りながら修正しながら”の良い訓練でした。機会があればまた参加したいです」

**翻訳ミスでうまく伝わらず**  
吉澤薬剤師

「主にPWJの薬とTMATの薬を払い出す作業を行いました。印象的だったのは、外国人傷病者に対して翻訳アプリなどを使って会話したものの、翻訳ミスでうまく伝わらず、再診となったこと。実際にそういうことは起こりうるだろうと思い、訓練の質の高さを感じました」

## 参加した隊員の声

**トイレや食事自己完結に衝撃**  
村上看護師

「災害というと、DMAT（行政主導の災害派遣医療チーム）が主軸になりフィールドホスピタルや搬送を実施し、NPOやNGOは強みの避難所支援を行うイメージを持っていましたが、今回の訓練でPWJがトイレや食事自己完結していたのを見て、NPOがここまで力をつけていることに衝撃を受けました」

**勉強するモチベ大きく向上**  
吉川薬剤師

「いろいろなチームと連携し、薬の調整をしたのは楽しさもありましたが、解熱鎮痛剤ひとつとっても違う言葉、医療方針の違いなどからくる難しさも感じました。海外の被災地に行けば、そういう場面に遭遇する場面もあるので、勉強するモチベーションもすごく高まりました」

**異なる組織間の訓練は初**  
久保看護師

「異なる組織間の訓練は初めて。TMATはいち早く被災地に入ってコントロールする役割が多いのですが、今回は逆の立場だったので、PWJの機能を損なわないように支援したり、そのなかでもTMATの役割も明確にしたりするなど、いろいろ考えました。すごく勉強になりました」

**指揮所のサポートが貴重な経験**  
関根・救急救命士

「とくに印象的だったのは、初日に人員が足りないということで、ロジスティクスとして指揮所のサポートを行ったことです。初めてで、指揮所内でどんなことをしているのかを知る貴重な経験になりました。今後の活動に生かしていきたいと思います」

ご協力のお願い

**TMATは皆様からのご支援をもとに  
精力的に活動しています！  
ご協力をお願いします！！**

1995年の阪神・淡路大震災での活動を契機にスタートしたTMATは、世界の人々の生命と健康を守るため、災害医療支援をはじめ総合的な医療支援活動を各国政府やNGO（非政府組織）、地域団体と協力しながら活動しているNPO法人です。私たちの活動は、主に企業・団体・個人の皆様からTMATの会員として資金協力していただくことで支えられています。ぜひ、ご協力ください。

正会員年会費 ..... 10,000 円

個人賛助会員年会費 ... 1 口 3,000 円 (1 口以上)

団体年会費 ..... 1 口 30,000 円 (1 口以上)

クレジットカードによるご協力

[http://www.tmat.or.jp/donate\\_on\\_the\\_credit/](http://www.tmat.or.jp/donate_on_the_credit/)

※VISA/MASTER/JCB/AMEX/DINERSの各種カードがご利用いただけます。

※提携カードでは、お取り扱いできない場合があります。

振り込みによるご協力

- 郵便口座記号番号：00170-4-564249
- 銀行名：ゆうちょ銀行
- 金融機関コード：9900 ■ 店番：019
- 預金種目：当座
- 支店名：〇一九（ゼロイチキユウ）店
- 口座番号：0564249
- 受取人：特定非営利活動法人 TMAT

振込先口座

さまざまな業界の団体・機関が国内外から参加